

## 参考資料

参考資料（１）：イギリス内務省犯罪防止大学校使用教科書 全翻訳  
（建築担当官養成用教科書）

『Design for inherent Security

-Guidance for non-residential buildings-』

参考資料（２）：英国環境設計による犯罪防止プロジェクトビデオ解説英文

『SAFER NEIGHBOURHOODS』

## 参考資料

参考資料(1) : イギリス内務省犯罪防止大学校使用教科書 全翻訳  
(建築担当官養成用教科書)

『Design for inherent Security  
-Guidance for non-residential buildings-』

著者 ; B.Poyner and Dr W.H. Fawcett

Published by Construction Industry Research and Information Association  
1995

## 〔概略〕

ビルと居住者の従来の安全性はレイアウトと設計とデザインの細やかにかかっている。

それらは多かれ少なかれ永久的で、従来の安全性の欠点は企画を付け加えるなどして「修復」できないことである。従来の安全性は僅かの経費かあるいは全くの無料で、長期にわたり最先端の開発計画となるのである。

この手引き書は人の住んでいないビル用の、従来の安全性の主要なデザインを解説している。実施可能なアドバイスは調査結果に基づいているが、それはこのトピックに残存する希薄な調査が最近の合理的で確実な方法しだいで増加するからである。

この最新のあるいは一新したデザインは建築家やビルのオーナーや賃貸者たちに活用でき、このガイドは広まっていき、デザインで適切な安全性が浸透していくことに気がつき、従来の安全性についての調査研究に刺激になる。

### Foreword and Acknowledgements

この手引書はボイナー調査研究所のバリー・ボイナー氏とケンブリッジ建築調査会社のウィリアム・フォセット医師、アンドリュー・コバーン医師、ステファン・ブラッツ医師によって進められ、C I R I Aの監修の元にあります。

C I R I Aによって進められた大半の調査研究は以下のスティーリンググループによって解説している。

P Veater (ThornUK会社, マルロー) — 議長

Dr E C Bell (予防対策協会, ロンドン)

M Buckley (The Association of Burglary Insurance Surveyors Ltd) — 第1企画

R burgess教授 (Burgess Jepson株式会社, Merseyside)

— representing the Chartered Institute of Building

Dr A J Burns Howell医師 (ディクソンズグループPlc, ロンドン)

R Carter (近代セキュリティシステム会社, Salford)

J Finney (ブリティッシュセキュリティ産業協会, Worcester)

P Hardy 巡査部長 (サセックス警察)

Bhewitt 最高検査官 (ホーム, オフィス盗難防止センター, スタッフォード)

D Hincks (TBV顧問, クロイドン)

N Newton (ギルフォード大学高等教育機関)

— representing the Chartered Institute of Building Services Engineers

T Pascoe (ビル調査研究出版社)

R Reed (Formerly of legal & General Insurance, ロンドン)

— ブリティッシュ保険協会協力

G Squire (Henry Squire & Sons, Willenhall)

—ブリティッシュHardware & Housewares

Manufacturers協会協力

D Williams (Ellis Williams Partnership,マンチェスター アンド ロンドン)

P Woodhead (環境課)

この企画はCIRIAの多大なる提供によるものである。

この企画のCIRIAのリサーチマネージャーはアン・エルダーソンである。

この企画への協力は以下の通り。

British Hardware & Housewares

Manufacturers Association

Building Centre Trust

Department of the Environment

Dixons Group Plc

Home Office

Interbuild Fund

Loss Prevention Council

Modern Security Systems Ltd

Thorn UK Ltd

この企画は2回の調査研究会を設けた。

1993年6月に行われた第一回目の関係者は以下の通り。

J Bourke (ケンブリッジ)

R Brimblecombe (Cowper Griffith Brimblecombe,ケンブリッジ)

A Chorley (Anthony Chorley: 建築家, Warley, W Midlands)

A Cooper (Rickaby Thompson Associates,ケンブリッジ)

J Crosby (Bolton & Crosby Architects, Harrogate)

K Davis (Bader Miller Davis Partnership, ロンドン)

I C Farquhar (Abacus Architects Ltd, Chelmsford)

I McGregor (Elder Lester Associates, Yarm, クリーブランド)

C B Nicholson (Clive Nicholson Associates Ltd,ケンブリッジ)

D Pattenden (Suffolk County Council, Ipswich)

A Procuta (Annand & Mustoe Associates Ltd,ケンブリッジ)

R Robinson (The Charter Partnership, Bedford)

R Saunders (Saunders King Moran, Ashton-under-Lyne, Lancs)

B G Woodcock (Woodcock Associates, Bridlington, E Yorkshire)

1994年2月に行われた2回目の調査研究会の関係者は以下の通り。

C Atkins (RDA Architects, Godalming, Surrey)

P Bradley (Damond Lock Grabowski & Partners, ロンドン)

D Brooke (Bedwell Brooke Partnership, St Albans, Herts)

J M G Fox (Rolfe Judd, ロンドン)

J Devas (Scott Brownrigg & Turner, ロンドン)

R Heath (Douglas Feast Partnership, ロンドン)  
M Irwin (John Living & Morrison Rose Architects, ロンドン)  
J Jenkins (Thames Valley 警察)  
J Lapthorne (GMW Partnership, ロンドン)  
J Shorten (Surrey 警察)  
B Sopp (Oxford Architects Partnership)  
C Stagg (Metropolitan 警察)  
A Starkey (Cecil Denny Highton, ロンドン)  
D Stephens (Stillman Eastwick Field Partnership, ロンドン)  
R S Thelwell (Hunter & Partners Architects Ltd, ロンドン)  
P M Ward (JKL Architects & Planners, Basingstoke, Hants)  
J White (Hertfordshire 警察)  
P Wilgoss (Metropolitan 警察)

CIRI と Barry Poyner Research Consultancy と Cambridge Architectural Research 社  
により、この手引書製作において多大なる情報提供を得た。

## 目次

### まえがき --- --- page48

目的と問題点

手引き書の使い方

### 第1章 ビルの安全性への手引き --- --- page51

防犯

ビルの安全性への新しい手引き

従来の安全性の概念

従来の安全性のデザイン

### 第2章 ビルデザインの安全性上の問題点

Master list of security issues -----page59

侵入盗

1 最近の夜盗状況

2 破壊とgrab raids

3 Ramraid

強盗

4 現金強盗

5 人への危害

盗難

6 Shoplifting

7 雇用者の盗難

8 顧客の所持品

9 Personal belongings at work

10 建物内のその他の盗難

車両安全

11 駐車場

12 駐輪場

13 荷積及び不荷積車両

14 飛行機駐停場

入口

15 顧客専用入口

16 雇用者専用入口

17 Fly-tipping

18 Loitering groups of youths

DAMAGE TO BUILDINGS

19 Wilful damage

20 Graffiti

21 Arson

### 第 3 章 ビルのタイプ別安全性の問題点

.....page110

商店と店舗

モールとショッピングセンター

事務所

Industrial estates

ホテル

レジャー施設・スポーツビル

パブ、バー、レストラン

車両離着場

公衆駐車場

ガソリンスタンドとサービスステーション

病院

学校

その他のパブリックビル

### 第 4 章 安全性の注意点 ..... page123

窓と侵入盗

ドアの安全

Natural ladders

照明と安全

The problem of security classification

### 第 5 章 Further information --- --- page142

各関連機関

参考文献等 page173

## まえがき

この本は建築家、ビル所有者、賃貸者に向けて、ビルの安全なデザインまた住居用でないビルの改築の手引き書となるものである。

主な目的は、見過ごしがちなビルにとって根本的に必要な安全性を提示することである。

この本で取り上げる安全性における問題点はすべてのビルのレイアウトやデザインに必要とされるものである。

### 目的と問題点

今までオフィスビルの様な住居用ではないビルの安全性は、住居用の建物よりも関心を持ってこられなかった。この手引き書の目的は人の住んでいないビルの安全性の研究を互いに進めていき、デザイナー達やその顧客たちへのガイダンスとなることである。

住居用でないビルのどこが違うのか、またそれ以上の異なる点を明確にしデザイナーのために問題を提示することで安全性について信用できる良い理由になるのである。

勤務中はよく監視できるが、夜はほとんど使用されない人が住んでいないビルに反して住居はその逆でありここに明白な違いがある。

それ以外の違いは、人が住んでいないビルは多くの人々に使用され、より公衆化されるのである。

人の住んでいないビルの数々の安全性上の問題点は、莫大な量である。

本書では全ての現状を補うことはしない。

メインの安全性の問題点やデザインからみたそれらの対処法に集中する。

#### <Research basis>

この手引書全体を通して論じていることは、調査研究に全てを担っていることである。

それは完全なる調査に基き推奨されたデザインである。しかしながら、調査を進めていくうちに明らかになることは、概念がかき乱され、活用的でないということである。

よって調査結果により実証された良い実例のいくつかを取り上げることとした。書き手たちは調査の基本を指し示すことに努力しているのである。

この手引書が、安全性とデザインの2つの関係についての必要性に基いた、更なる調査研究に活用されることを願っている。

## <Security issues, not security measures>

この手引書において刷新された重要なことは、security measuresでないsecurity issuesの強化である。Security issuesとは、以下のとおり3つの重点がある。

- それらは一般的で、ごく普通のいくつかのタイプのビルである。
- それらは犯罪の問題点やデザインの中核などを総体している。
- それらは簡明で盗難の型である。

いくつかの問題は「一般的な夜盗」(S1)にあるように誰にとっても一般的であろう。しかし、「顧客専用入口」(S15)にあるように、限られた安全性について学んだ人々には見慣れないものであろう。この手引き書における安全性についてコンセプトは、古典的な安全設計よりも、より幅広い視野に立っているのである。

Security issuesの重要性を評価するために試みるようなことをしてはいけない。その主な理由は、個々の事情からなるケースは、適切なあるいは、それらの重要性に比例し決定づけられたissuesであるからである。2番目の理由は、それをただ「重要」とだけにせず、Security issues全般を建築家達は知り得るべきだからである。

このガイダンスでは取り巻く環境の中でデザインにおける犯罪の減少の関係性を調査することを主体にしている。それは関係性に焦点を合わせるのではなく、それぞれ異なる犯罪を取り上げ、これらがデザインにどの様に影響されているかを指示するものである。

### How the guidance is organised

安全性については第一段階のレベルで討議されている。主な安全性についてを詳細に指導することは他の出版物において適当な参考例を用いて既になされている。

#### 5つの項目

パート1: 「An approach to building security」ではビルデザインにおける従来の安全性の一般的なコンセプトを述べている。

安全性とはビルの根本的な事であるということと従来の安全性の考えをどの様にデザインに絡めていくかを強調している。

パート2: 「Security issues in building design」はこの手引書の中心である。「The master list of security issues」では概略を述べており、21 security issues checklistである。

それぞれのissuesに表されることは、明らかに同じ建物で用いられていることによる結果であり、犯罪や盗難のようなことが起き始めている

て、どのような場所で起こったかを指摘することにより、それらの予防に接近することは、問題を解決し克服でき、数々のデザインの重要点に伴うのである。そしてついに、調査やあらゆる分野の今後の情報が参考になるのである。デザインの重要点に注目することは、詳細にも完璧にもするのではなく、それらはデザインのポイントを企てるものである。

パート3：「Security issues in selected building types」では多くの普通の人の住んでいないビルにおけるsecurity issuesについて述べている。それぞれのビルのタイプはsecurity issuesのcheck listであり、調査研究の概略によって適切に補足された。

パート4：「Notes on security measures」を含む内容である。外壁の詳細にわたり2重にしたりしないのは、それはすでに他の分野で活用しているからである。Security measuresのいくつかを紹介し解説することは、安全なデザインについてごく普通に推奨することである。

最後に、パート5 「Further information」の分野を参照している。

#### <手引書の活用法>

この手引書は読者達が拾い読みし、そして参考にするためのものであり、後に繰り返しこれを読むことになるだろう。

特殊な企画デザインの取り巻く環境を参考に活用する際に、デザイン工程の略図はパート1に記している。(参考15頁)

この手引き書は特殊な企画の参照を制限すべきでない。基本的なデザインのコンセプトが進化していくにつれ、デザイナー達はすでに同化しアイデアを活用するのである。

もし従来の安全性のアイデアのコンセプトにインパクトがあるなら、それはデザイナー魂を築き上げる重要なものであろう。

よって、デザイナー達にこの本の全体にざっと目を通してもらいたく、そして特にパート1の「An approach to building security」を読んでほしい。